様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１０１４

研究課題名（和文）Ｊ．デューイの教育課程論の認識論的研究

研究課題名（英文）An Epistemological Study of J.Dewey's Theory of Curriculum

研究代表者
梶原　郁郎（Kajiwara, Ikuo）

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：３０３９００１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円、（間接経費）　　480,000円

研究成果の概要（和文）：「J.デューイの教育課程論の認識論的研究」の研究課題の下、報告者はデューイの教育課程において学習者はどのように認識形成を進めうるのかという観点から、デューイの教育課程を分析して、その成果を以下の四編の論文に纏めた。（1）Ｊ.デューイの教育哲学における個人と世界の一元論－事物認識形成と他者認識形成両論上の意味－、（2）『君たちはどう生きるか』（吉野源三郎）の社会認識形成論－ 視座転換を可能とする他者認識の段階的形成の筋道－、（3）戦後生活単元学習批判の批判と継承－Ｊ.デューイの自然科学教育論を踏まえて－（4）教育過程分析の基礎条件－内容と方法に関するJ.デューイの二元論を踏まえて－。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed the structure of J.Dewey's of curriculum from the standpoint of how learners understand and use knowledge of subject matter. The result of analysis summarized as following four papers. (1)A Continuous Relationship between the Individual and the World in J.Dewey's Educational Philosophy:Focusing on the Way of Knowing Things and Peaple, (2)A Theory of Social Recognition Formation in How You Live (Yoshino Genzaburo):Stepwise Formation of Recognition of Others for Perspective Change, (3)An Examination of Science Educators'Criticism on Life Unit Learning:Through Consideration on J.Dewey's Theory of Science Education, (4)The Fundamental Condition to Analyze Educational Process:Through a Consideration of J.Dewey's Criticism about Dualism between Subject Matter and Method.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：デューイ　教育課程　認識形成　仕事　科学　民主主義

１．研究開始当初の背景

本研究の目的は、J.デューイの教育課程の内部構造を認識形成論の水準において明らかにすることだが、本研究の研究開始当初の先行研究の状況は以下の通りである。

1990年代に入りS.C.ロックフェラーら(ロックフェラー1991、L.A.ヒックマン1998）による研究によって、デューイの経験主義教育論への関心が米国で再燃した中、R.B.ウエストブロック（1992）はデューイの民主主義社会論との関係において、デューイの教育課程論を、学習者の認識形成過程に着目して改めて問いはじめている。この着眼点は、W.ファインバーグら（ファインバーグ 1993、E.W.ロス1998）に受け継がれている。このようにデューイの教育課程論は、デューイの民主主義社会論との関係を問う視点を含んで、改めて検討されはじめてきている。

この課題提起を前にデューイの教育課程研究を概観するとき、同研究は認識形成論の水準で進められているとはいえない。『シカゴ大学紀要』（*University of Chicago Records*）などデューイ実験学校に関する新たな資料による研究が L.N.タナー（1991、1997）によってはじめられ、国内でも小柳正司（1999）によって着手されている。それらの研究によって、デューイ実験学校で“どのような知識が取り上げられたのか”が、学年毎に系統的に明らかにされてきているが、“学習者はどのような知識をどのように理解・活用して認識形成を進めえたのか”という観点から、デューイの教育課程が検討されていない。この点は、森久佳（2002)、伊藤敦美(2004)、千賀愛(2009)、高浦勝義（2009）の研究でも同様で、「教科主義と活動主義（経験主義）とを調停する実践論理」(市村尚久（2000））は、学習者の認識形成過程に焦点を当てて依然問われていない。デューイの教育課程研究のこの現状が、本研究の研究開始当初の背景であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の三つの視点から、仕事 occupations を中軸とした地理･歴史および科学学習であるデューイの教育課程の内部構造を認識形成論の水準において明らかにすることである。(1）デューイの教育課程論を、科学的認識形成を含む環境制御能力形成論として分析する。(2）デューイの教育課程論を、行為に連動可能な社会認識形成論として分析する。(3）デューイの教育課程論を、人間の認識形成の在り方として構想されているデューイの民主主義社会論を保障するための内容・方法として分析する。以上の作業を通して、デューイの教育課程研究が知識内容の構成に関する研究に留まっている現状に、新たな知見を提示する。

３．研究の方法

本研究は次の方法を採った。(1）仕事と地理・歴史との内的関係、仕事と科学との内的関係を認識形成過程として把握するためには、仕事・地理・歴史・科学の知識を分析者が理解することが要件となる。上述の先行研究で外されている、本来自明であるはずのこの要件を本研究は研究方法とする。この方法の欠落は、デューイの教育課程研究が、同課程を学習者の認識形成過程として読み直す教育過程研究として進められてきていない根本要因であるので、本研究はその方法自体を研究対象として問う作業にも取り組んだ。（2）デューイの教育課程研究が教育過程研究として進められてきていない要因として、デューイの民主主義概念はいかなる認識形成を社会の成員に要求するかという観点から同概念が把握されていない点が挙げられる。なぜならその作業がなされていれば、デューイの教育課程を認識形成論の水準で問う視点が自ずと用意されるからである。したがって本研究は、デューイの民主主義概念との関係において、デューイの教育課程を分析するという方法を採った。

４．研究成果

（1）論文

「J.デューイの教育課程論の認識論的研究」という研究課題の下、本研究は、仕事を中軸とした地理・歴史および科学学習論であるデューイの教育課程論の内部構造を明らかにする課題に取り組み、その成果を以下の四編の論文に纏めた。

①Ｊ.デューイの教育哲学における個人と世界の一元論－事物認識形成と他者認識形成両論上の意味－
②『君たちはどう生きるか』（吉野源三郎）の社会認識形成論－視座転換を可能とする他者認識の段階的形成の筋道　－
③戦後生活単元学習批判の批判と継承－Ｊ.デューイの自然科学教育論を踏まえて－
④教育過程分析の基礎条件－内容と方法に関する J.デューイの二元論を踏まえて－

論文①では、デューイの教育課程論を認識形成論として検討していくために、個人と世界の一元論に基づく認識形成の原理を明らかにした。他者と目的を共有する状況の中で事物の意味を獲得するという認識形成の原理をデューイは幼児の経験に見出し、その原理を教育課程の基底に据えて、仕事から科学への知的移行過程に応用している。これによって学習者は、仕事において目的を共有した中で、科学の観念を獲得できるように、仕事学習は組織されている。この教育方法の基底に、個人と世界の一元論の教育哲学が敷かれている。このようにデューイの二元論哲学批判は、哲学内部での批判という域に留まらず、現実の教育課程構想に結実している。

論文②では、デューイの教育課程論を道徳教育論として分析する視点を得るために、デューイの経験主義を土台としているとされる『君たちはどう生きるか』（吉野源三郎）の社会認識形成論を、行為に連動可能な他者認識形成論として分析した。その他者認識形成論には、自己を他者の側から見る視点の形成が組み込まれており、これは、認識が行為に連動する要件となっている。その他者の視点形成の問題はデューイにも見られ、他者認識形成が行為に結びつく点にデューイは道徳の所在を求めている。したがって論文②で得られた知見を観点としてデューイの教育課程を分析すれば、同教育課程を、行為に連動可能な他者認識形成論として分析できる。したがって論文②では『君たちはどう生きるか』を分析対象として取り上げ、他者認識形成と行為との関係を検討したわけである。

論文③では、デューイの教育課程における仕事から科学への知的移行の仕組みを捉えて、戦後生活単元学習批判におけるデューイ批判（デューイの科学教育論に対する批判）を修正した。そのデューイ批判を論文③では五点において整理して、その四点が生活単元学習批判としては妥当してもデューイ批判として妥当しないことを明らかにして、もう一点についてはデューイ批判として妥当することを指摘して、それをデューイの教育理論に継承する必要性を明示した。この作業を論文③では、デューイの教育課程における仕事と科学との内的関係を学習者の認識形成の次元で明示することによって、行った。

論文④では、以上三つの論文作成の基底としていた研究方法そのものを研究対象として、デューイの教育課程を教育過程（学習者の認識形成過程）として分析する基礎条件を把握した。その作業を論文④では、内容と方法に関する J.デューイの二元論批判を踏まえて行い、その基礎条件を、デューイの立場である一元論に基づくものとして提示した。このように論文④がデューイの教育課程研究の方法論自体を問題としたのも、デューイの教育課程に関する上述の先行研究が教育

過程研究として展開されていない現状は、研究方法そのものをも問うことを要求しているからである。したがって論文④は、教育過程分析の基礎条件を検討したわけである。

以上四編の論文は、デューイの教育課程の全体像を認識形成論の水準で分析していくための基礎を用意している。その全体像を明らかにしていく中で、そのどこに、デューイの民主主義社会論が要求する人間の資質形成を見出すことができるのかを問えば、デューイにおける教育課程論と民主主義社会論との内的関係を、学習者の認識形成過程に焦点を当てて明らかにできる。この作業は、1990 年代のデューイ研究による課題提起に全面的に応えるもので、その基礎的知見を以上四編の論文は提供するものである。

（2）図書

後掲図書『教育課程論』では「学力の射程」（第 3 章)、『道徳教育論』では「教科教育と道徳教育」（第 10 章）を執筆担当した。前者では、知識と思考との関係に着目してデューイの認識形成論を整理する作業を、後者では、学校の知識教育の危険性に関するデューイの見解を検討する作業を踏まえている。いずれも、前掲四編の論文と共通の課題意識に立って、学習者の認識形成に焦点を当ててデューイの見解を検討した論稿である。

（3）学会発表

後掲学会発表②は前掲論文④として纏めたものであるので、以下、他 4 つの学会発表の成果について報告する。

学会発表①は、デューイの熟慮 reflection による社会認識形成と行為との関係を検討して、デューイにおける熟慮概念の道徳教育における機能を次の内容構成で報告した。第一に、熟慮概念の基底的意味を明示した後、熟慮（思考）の条件を考察する。第二に、一連の熟慮過程の中で知識はどのように活用され獲得されるのかを検討する。第三に、デューイの歴史学習に熟慮概念がどのように応用されているのかをする。以上の作業を通して本発表は、熟慮による知識獲得（熟慮における知識の活用）と行為としての道徳形成との関係を把握した。この作業を本発表は、デューイの歴史学習を認識形成過程として考察する作業を踏まえて行った。

学会発表③では、デューイの道徳教育論を踏まえて、自然科学系教科である算数による道徳教育の内容と方法を提示した。道徳教育において不可欠な要素である、自己を他者の立場から対象視する他者の視点形成は、デューイの教育理論にも見出すことができるが、その問題は教科の知識理解との関係において検討されてはいない。この点を課題として引き継ぎ本発表は、0 の段のかけ算の授業内容の構想・実践を通して、算数教育よる他者の視点形成について次の結論を報告した。入念に構想された発問の下で学習者が算数の知識を理解・活用できれば、学習者は授業後の自己から授業前の自己（知識を理解できていなかった自己）を対象視できる。

学会発表④は、デューイの仕事学習論を踏まえて、地域の素材を活かした総合的学習の実践事例である椿油作り（布部小学校）を考察した。ここでは、デューイの仕事学習論から、認識形成に関する次の二つの観点を把握することによって、椿油作りから理科・社会科への知的移行についても具体的に提案した。(1) 仕事の後には、仕事に対応させて社会の中の生産技術を理解できる、(2) 仕事から次の仕事への移行、すなわちある技術段階から次の技術段階への移行を構想する。この二つの観点の下、その知的移行を提示したのも、「教科主義と活動主義（経験主義）とを調停する実践論理」が授業内容レベルで究明されていない上述の先行研究状況を前にしていたからである。

学会発表⑤は、学会発表③同様に他者の視

点形成（自己を他者の立場から対象視する他者の視点形成）に着目して、算数教育における他者形成の局面を見出すことによって、算数教育による道徳教育を提示したが、学会発表③とは次の点で異なっている。第一に、算数教育による他者形成について論じているメタ認知研究と本研究との質的相違を検討している。メタ認知研究では、算数の知識理解を保障する算数教育内容そのものを構想する中で、算数教育による他者形成が論じられてはいない。メタ認知研究における他者形成を促す問は、算数の知識理解のための問ではなく、「他にどのような解き方があるか」のような形式的な問となっている。第二に、学会発表⑤は学会発表③同様に、算数の実践事例およびアンケート調査結果を用いているが、実践事例も調査資料も新たなものを用意している。新たなデータを用いることで、算数の知識理解の結果についても、算数の知識理解を前提とする他者の視点形成の結果についても、一層詳細な知見を提示した。

以上のように学会発表においても、デューイの教育課程論を認識形成論として読み直すという作業が基底に据えられている。学会発表①②④は、「研究の目的」に欄に記した課題に直結するものであり、学会発表③⑤は、その課題の次にくる課題として取り組んだものである。このように本研究は、申請した課題として明示はしていない課題についても新たに取り組み、成果を報告した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

①梶原郁郎、教育過程分析の基礎条件－内容と方法に関する J.デューイの二元論を踏まえて－、査読有、『日本デューイ学会紀要』第 54 号、2013 年、65‐74 頁。

②梶原郁郎、戦後生活単元学習批判の批判と継承－Ｊ.デューイの自然科学教育論を踏まえて－、査読有、『日本デューイ学会紀要』第 53 号、2012 年、221-230 頁。

③梶原郁郎、『君たちはどう生きるか』（吉野源三郎）の社会認識形成論－ 視座転換を可能とする他者認識の段階的形成の筋道 －、査読無、『愛媛大学教育学部紀要』第 58 号、2011 年、1‐20 頁。

④梶原郁郎、Ｊ.デューイの教育哲学における個人と世界の一元論－事物認識形成と他者認識形成両論上の意味－、査読有、『日本デューイ学会紀要』第 52 号、2011 年、193-202 頁。

〔学会発表〕（計５件）

①梶原郁郎、J.デューイにおける熟慮 reflection 概念の道徳教育論上の機能－認識と行為－、日本デューイ学会第 55 回大会、2011 年 10 月 2 日、関西学院大学。

②梶原郁郎、教育過程分析の基礎条件－内容と方法に関する J.デューイの二元論の検討を踏まえて－、日本デューイ学会第 56 回大会、2012 年 9 月 23 日、東洋大学。

③梶原郁郎、自然科学系教科による道徳教育の内容と方法－J.デューイの道徳教育論を踏まえて－、日本デューイ学会第 57 回大会、（2013 年 9 月 22 日、新潟青陵大学。

④梶原郁郎、地域の素材を活かした総合的学習の実践事例－J.デューイの仕事学習との関連－、日本教育方法学会第 49 回大会、2013 年 10 月 6 日、埼玉大学。

⑤梶原郁郎、算数教育と道徳教育との内的関係に関する事例研究－算数の知識および算数観に関する学生アンケート調査を踏まえて－、東北教育学会第 71 回大会、2014 年 3 月 8 日、東北大学。

〔図書〕（計２件）

①梶原郁郎 他、一藝社、教育課程論、2013 年、54‐66 頁（第 3 章）。

②梶原郁郎 他、一藝社、道徳教育論、2014 年、150-162 頁（第 10 章）。

６．　研究組織

（1）研究代表者

梶原郁郎（KAJIWARA IKuo）
愛媛大学・教育学部・准教授
研究者番号：30390016